

## ★ 「武蔵国府寺」創建伽藍の区画溝の発見と創建伽藍の復元★

川瀬健一

「武蔵国分寺」に関する三つの資料「新修国分寺の研究」「国分寺の創建」所収の二つの「武蔵国分寺」に関する論文と、山田さんに送ってもらった、福田信夫（この方もしかしたら資料館の F さんですね）著の「鎮護国家の大伽藍 武蔵国分寺」のコピーを精査したところ、この寺の創建伽藍、武蔵国府寺と名前を付けることのできる伽藍の伽藍の区画溝がすでに発見されており、これをもとに、創建伽藍の位置と大きさがほぼ復元されることがわかりました。

### 1) 「武蔵国府寺」創建伽藍の復元

結論を先に言うと、創建伽藍は、伽藍区画 EFGH の中の東側、現在遺跡として見えている金堂院の東側に存在。伽藍形式は薬師寺式。

大きさは、講堂・僧坊・金堂・塔を囲む伽藍内郭は、南側の GH 線の G を起点に西側へ東西 194m。南北はほぼ GF 線の G を起点に北側に 250m の長方形。これは内郭伽藍を区切る大溝の中心で測ったもので、大溝の内側にさらに掘立柱で瓦葺の板塀がぐるっと囲っていたと思われます。そして板塀の途中で中門があり、さらにこの大溝の南側少し離れて排水路としての小溝があった。

この内郭を囲って南大門を含む外郭が存在した。

外郭の大きさは、東西 288m。南北は 344m。これも伽藍外郭を区切る大溝の中心で測定した数値。この大溝の内側に内郭と同様に瓦葺の板塀が囲み、その板塀を切って南大門があった。

内郭大溝と外郭大溝の距離は東西南北ともに 47 メートル。

さらに寺域も想定できます。

大溝から復元できるのは、南辺・東辺・西辺だけ。北辺は南辺に並行していたか、もしかして現在の寺域の北辺である IB 線かもしれません。ここでは長方形として想定しておきます。

寺域は東西 312m。南北は 368m。寺域を示す大溝と伽藍外郭を示す大溝の距離は約 12m。

この創建伽藍に含みませんが、創建伽藍の北西側の崖の上に、北方建物と呼ばれている大きな建物が存在した（この建物は発掘記録では南北軸はほぼ真北東 2 度偏）。これは武蔵国府寺の外に隣接して、従来想定されているように、武蔵国の国師である僧侶の起居する「北院」と呼ぶべき伽藍であったと想定できます。

### 2) 復元に至る経緯

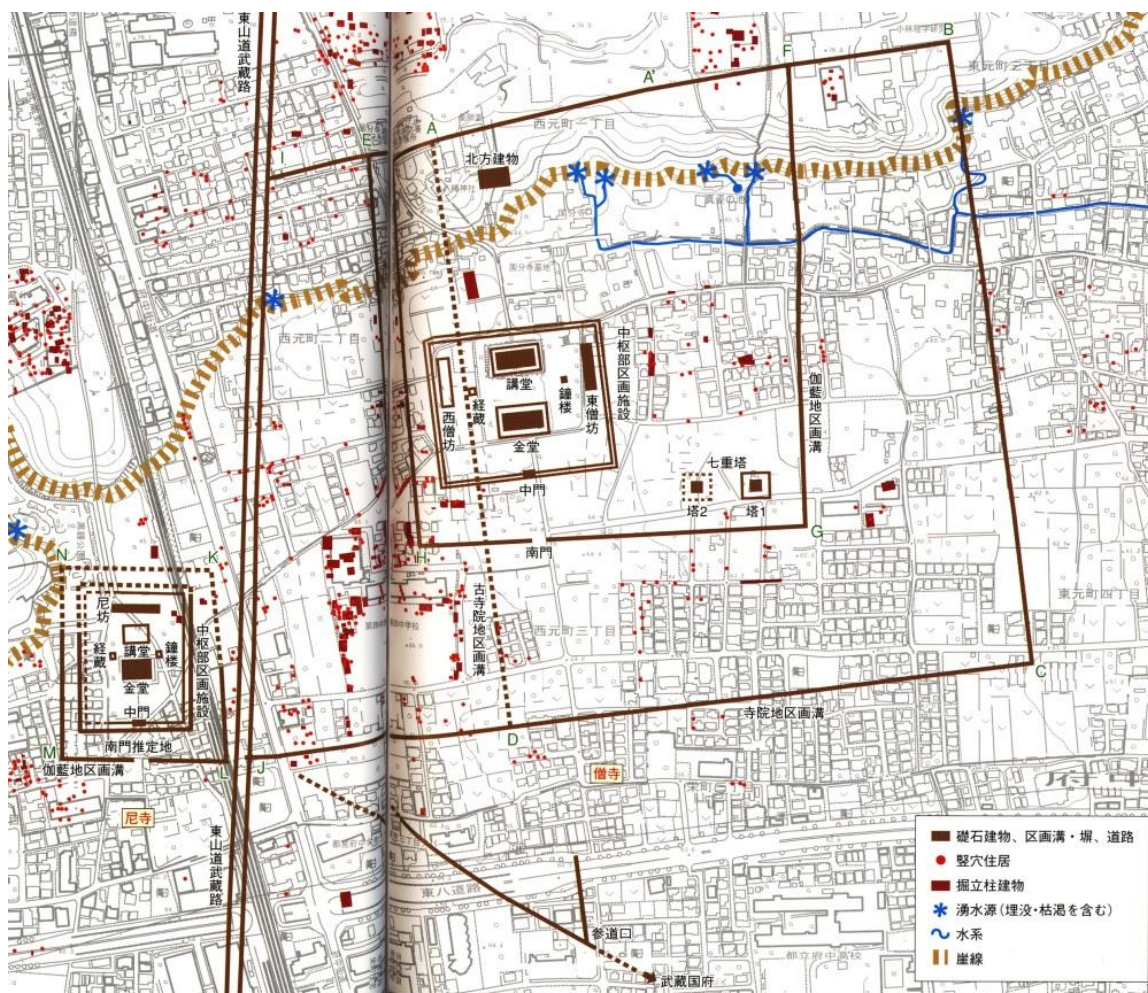
従来から私たちはこの寺の創建伽藍は薬師寺式伽藍で東西南北が正方位の東山道武蔵路

に並行したものと想定してきました。しかしその内郭伽藍を区切る溝は東辺と南辺しかなく、これが伽藍区画溝の EFGH の策定で壊されたと考え、実際の大きさと位置を想定できませんでした。

山田さんとの議論の中で、伽藍域 EFGH と金堂院伽藍は一体との山田さんのご意見に対して私は、これは南北軸の向きが異なるから別のものと意見をぶつけぶつかりました。

この中で私の意見に対して山田さんは、金堂院が西の隅にあって南北軸が西に7度傾いているのは「建設者がそうしたかったからだ」と答え、私はこれでは説明になっていないと応酬しました。

この議論が山田説の撤回によって棚上げになったあと、どうしても気になった私は、今発行されている「武蔵国分寺跡」の地図をじっと眺めました。金堂院を建設した人はなぜ伽藍区画 EFGH の西側に偏って金堂院を建設し、しかもその南北軸を西に7度傾けたのかと考えていました。



この時気が付いたので、金堂院の東側の大きな空白域。この空白域の南側に伽藍区画 GH 線に接して（実際は 43m 離れている）塔 1 が存在している。金堂院はこの空白域を避けて、建設されたのではないかと。

この考えが浮かんでみてさらに眺めれば、この空白域には金堂院が丸ごとすっぽり納まる  
ではありませんか。

私はすでに金堂院の金堂と中門は創建伽藍で準備され作られなかった金堂と中門の部材  
を転用したと表明していました。ここと今回の発見を結び付ければ、この金堂院の東の空  
白域にはすでに大きな寺院が建設作業中で、少なくとも塔一基は完成していたのだから、  
他の伽藍、西塔や金堂や講堂や、さらには僧坊や鐘楼・経堂の基壇の建設くらいは始まり、  
確実に、内郭伽藍の区画や南大門がある外郭伽藍の区画も設定されて、区画を示す大溝は  
掘られ、一部には区画を示す瓦葺の板塀ができていたのではないかと。この建設途中の創建  
伽藍を壊さずに避けて、その塔を生かした形で西側にとりあえず武蔵国府寺を建設する。  
これが金堂院建設者の意図であり、この際にこの意図を実現するために、創建伽藍の内郭  
伽藍区画大溝を西と北に拡大して大きな区画を作り、そこに新たに金堂院を建てた。この  
際彼らの背後に朝廷はいなかったため、正方位を図る技術はないため、磁石で磁北を図っ  
て作った。だから金堂院は正方位の EFGH の区画の中にあるのに、南北軸が西に 7 度傾き、  
区画の西側に偏って作られたのではないかと。

このように論理的に推測できました。

ならば、創建伽藍の伽藍を区画した溝ぐらいでているのではないかと。この考えで、手元  
にある三つの論文を精査してみると、その結果、創建伽藍の伽藍域を区画する大  
溝を二本見つけたのです。

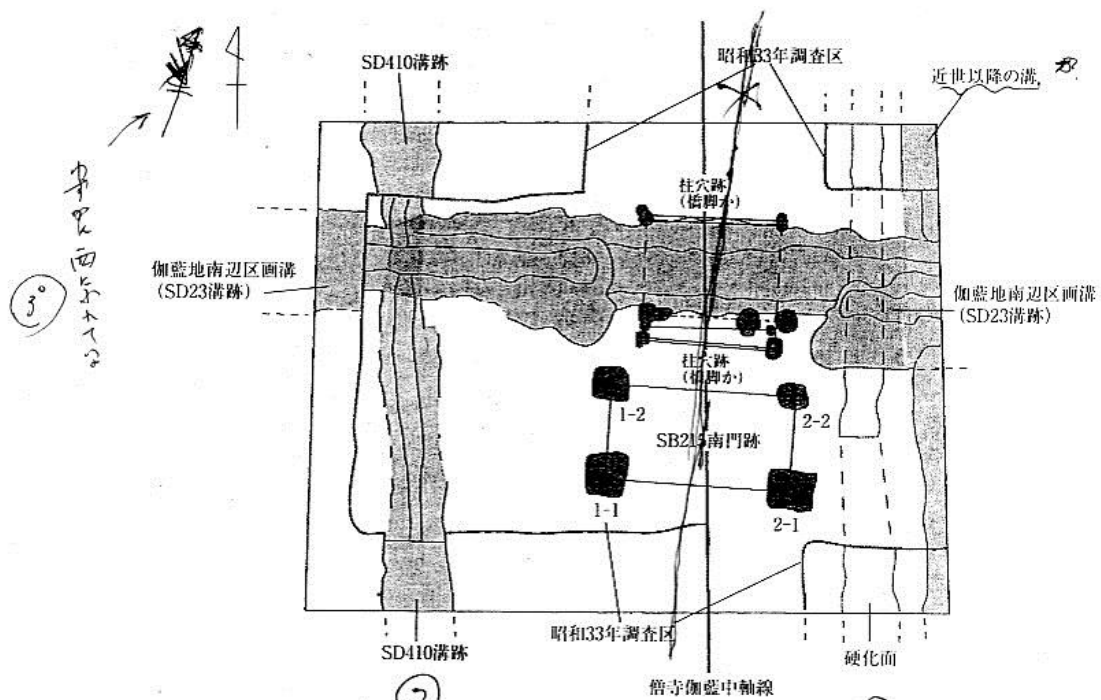


図6 南門地区全体概略図 (縮尺 1/200)

### 3) 創建伽藍の区画溝の発見

これは先のコメントに書きましたが、ここに再録します。

武蔵国分寺に関する研究論文「新修」「創建」そして山田さんから頂いた「鎮護国家の大伽藍武蔵国分寺」の三つの史料の精査が終わりました。なんと研究者も考古学者も、そして先の資料館の F 氏も無視していた、創建伽藍の伽藍域や寺域を示す溝の痕跡がすでに発見されていることを確認しました。書いてあったのは、「創建」の論文の第Ⅱ部発掘調査の成果の3南門地区の調査・P330、31です。

詳しくは別スレッドにして報告しますが、南門は創建伽藍の伽藍域を示す溝をトレースしたと考えてきた GH 線に沿って存在しますが、その南門の東2mほどのところに、この溝に北から直行する溝（名称はつけられてない）があり（幅は1mほど・深さ不明）、これが GH 線のさらに南、塔から90mのところに発見した古い溝と南門の南でつながっている可能性が大であること。これは伽藍の外郭線（内郭・金堂塔などの伽藍の外）を示す溝ではないだろうか。さらにこの南門の東の溝から西に11m離れたところにも、GH 線に北から直行する溝（幅1m、深さ不明）〈SD410 溝〉があり、これは先ほどの伽藍外郭線のさらに外側の寺域を示す溝と考えられます。

また報告書によると GH 線はここでは SD23 溝と名付けられていますが、溝は三期にわたって建設され、1は幅2.4m深さ0.4m、2は幅2.4m深さ0.6m、3は幅2.4m深さ1mだそうです。これによって GH 線の歴史もわかります。

この二つの溝の存在を、すでに知られている伽藍域を示す FGH 線などと合わせて考察すると、創建時の薬師寺式伽藍の全容を復元することが可能です。

### 4) 創建伽藍復元のための計算

ここから先は、前に肥沼さんがブログに掲載してくれた「武蔵国分寺跡全体図」に基づいて計算しました。図面からの復元ですから数メートルは間違えるかもしれません。ちなみに報告書などでわかっている数値はこれを使いました。

南門の東西で見つかった溝。西側はSD410 溝と名付けられていますが、東側は名無しです。そこで東側の大溝を①、西側の大溝を②として論を進めます。

南門の北側にある SD23 溝とは、全体図にある伽藍区画線の GH で、創建伽藍の伽藍域を区画する溝です（これを内郭区画溝とします）。

大溝①と②はこれに直交してさらに南に延びているので、GH 線とは異なる別の溝です。

しかしすでに山田さんが「鎮護国家の大伽藍」の P59 にある「塔の南90mの地点にある国分寺で最古期と判断できる布堀地業遺構」が、伽藍の区画溝だとしていました。この考古学用語は難しいですが、要するに「布状に掘った溝」ということですので、その大きさは明示されていませんが、山田さんの判断は妥当です。

したがって東側の大溝①はこの塔から90m南の大溝と交わると考えられ、GH 線が塔や

金堂のある伽藍域、つまり伽藍内郭区画溝ですので、この大溝①と塔の南を走る溝は伽藍外郭区画溝と考えられます。

とすれば、①からさらに 12mほど西にある②は、そのさらに外側、寺域を区画する溝だと思われます。

残念ながら創建伽藍内郭区画溝の西辺は、南門のところからは出ていませんでした。

しかしこの西辺がどこにあったかは、今までに分かった溝の相互関係から割り出せます。

大溝①は南門を通る僧寺伽藍中軸線と GH 線の交点からおよそ中心が 4 m 東にありました。そして GH 線と大溝①につながる塔の南の溝との距離は、塔から溝までが 90m。そして塔から GH 線は 43m と報告書にあるので、伽藍内郭溝と外郭溝の距離はこの差、つまり 47m であります。

GH 線の G から南門での僧寺伽藍中軸線までの距離は、図上で約 245m。ここから 4m + 47m を引けば、194m と算出できます。GH 線の G 点から西に 194m。これを「全体図」の縮尺で記してみると、その場所はおおよそ、東僧坊の東にある板塀のさらに東の大溝（僧坊の中心の東側）から GH 線に向かって垂直に線を下したあたりです。

まさしく現在の金堂院は、創建伽藍の内郭区画線の一部を壊して、しかし全体は重ならないように建設されていたのです。もしかして「国分寺創建」の論文の東僧坊発掘の項に、ここに南北に走る大溝の遺構が掘り出されたとあるかと期待して再読しましたが、ありませんでした。このように想定せず、住宅建設に伴う緊急発掘で限られた範囲しか発掘していないからでしょう。

こうして創建伽藍の内郭伽藍区画線の長さや位置は復元できました。

GH 線上の西の端を一応「い」点としておきましょう。アルファベットが乱立しているので。

「い」点は G 点から西に 194m。南門のところでは GH と「僧寺伽藍中軸線」の交点からは 51m の場所で、区画溝はここから北に延びていることが想定できます。（ここから先はのちほど）

創建伽藍外郭区画線は内郭区画線である G い線の南 47m。西の角は大溝①との交点「い」点の南 47m。ここを「ろ」点とします。東の角は、FG 線からさらに 47m 東でしょう。つまりその長さは内郭区画線 194m に東西にそれぞれ 47m 加えたもの。すなわち 288m。この東の角を「は」点としておきます。この「ろ」「は」を起点に外郭区画溝はそれぞれ北に延びているはず。長さの想定はのちほど。

さらに外郭区画溝の南には約 12m 離れて寺域区画溝が。この東西の角を西「に」東「ほ」点としておきます。その長さは、 $288 + 12 + 12 = 312\text{m}$  となります。

これで創建伽藍の内郭・外郭・寺域を示す区画溝の南辺の位置と長さは確定。

では東辺と西辺はどこまで伸びていたか。

残念ながら発掘報告書にはこれといった溝が出てきません。

しかし「全体図」では小さくはつきりしませんが、現在資料館で配っている「史跡武

蔵国分寺跡」の図面を見ていると、塔1・塔2の北側の空白域の西北に現在の東僧坊のすぐ東側に南北軸の掘立柱建物があります。これはもしかして創建伽藍建設にかかわる建物かその西僧坊跡ではないか。

さらにその北側の住宅地の北を区画する道路のあたりに、東西に幾つか筋状の掘立柱建物が。これはもしかして伽藍区画線の内側にたてられた瓦葺板塀の跡ではないか。

こう見ると創建伽藍内郭区画線の北側がこの住宅地の北側の道路あたり。

こう見当をつけて、その中に金堂院全体を平行移動してみるとぴったり入る。

計算としては、現在の金堂院の東辺の東僧坊の中心の東側を起点に金堂院全体を東に7度回転させて方位を南北正方位とし、それをそのまま東に平行移動させてみた。ぴったり入る。

そうすると先ほどの創建伽藍内郭区画線であるFG線のGを起点にしてその金堂院の北の板塀とのぶつかる点を図ってみるとおよそその長さ200m。でもこれでは講堂との距離も短いので、とりあえず50m北に伸ばして250mとした。ここは推定値です。もう少し短いかも。

創建伽藍内郭区画線の東西の角を、西「へ」東「と」点としておきます。

外郭区画線はこの「へと」線のさらに北側47mのところ。外郭区画線の東辺と西辺の長さは、 $250\text{m} + 47\text{m} + 47\text{m} = 344\text{m}$ 。

寺域線はさらにその東西北12m離れたところなので、寺域線の東辺と西辺の長さは、 $344\text{m} + 12\text{m} + 12\text{m} = 368\text{m}$ 。となります

計算の概略は以上です。

長くなりましたが、「武蔵国分寺」の創建伽藍(=「武蔵国府寺」)の復元です。質問をどんどんしてください。わかる限りでお答えします。

追伸：『鎮護国家の大伽藍』は資料館のFさんの御著書ですね。だから歴史学者とはことなる現場の考古学者の意見が出ている。購入して読んでみます。

そうそう、伽藍の塔と塔の距離を復元していませんでした。金堂などはまだやっていません。

## 5) 創建伽藍の塔と塔の距離

二つの塔は塔心礎間で108m離れています。

計算は、

塔1は区画溝の南辺から43m北にある。おそらく東辺からも43m西に図面で見てもおよそ40なので43で計算。

本来の塔2も区画溝の南辺から43m北で西辺から43m東。

内郭伽藍区画溝の長さは194m。

$194-43-43=108\text{m}$ 。今の塔1と塔2の距離  $55\text{m}$  のおよそ倍です。この距離なら基壇規模が  $17\text{m}$  四方で、塔身が  $10\text{m}$  四方、高さ  $60\text{m}$  ほどの塔が二つ東西に並んでも、ゆったりした間隔で、この北に東西  $30\text{m}$  もある金堂と講堂があっても不思議ではありませんね。

(2016年8月29日)